

# 『好色一代女』の諷刺小説的側面

——卷二までを中心に——

谷 脇 理 史

## 一

サンゲ物語、封建社会を生きる女性の悲劇的な生涯を描く、といった『好色一代女』のとらえ方に対して、私はこれまで何度か疑義を呈して来た。もはや三十年以上も前になるが、『好色一代女』論序説——一つの設定をめぐって（『近世文学論集——小説と俳諧』、昭46年7月、のち拙著『西鶴研究序説』（昭56、新典社）に収載）において私は、そのサンゲの構想は作品の枠組として生かされているにすぎず、それがサンゲの内実を備えていない作品であると強調し、その好色風俗小説的な側面を重視して読むべきことを主張した。また、『好色一代女』試論——そのしたたかな生と性（『文学・昭60年7月、10月号、のち拙著『浮世の認識者 井原西鶴』（昭62、新典社）に収載）では、主人公の生のあり方や語りの内容を問題にしつつ、それが、悲劇的な生涯<sup>い、い、い</sup>どころか、強くたくましくしたたかな一代女の生を印象づける作品であること、同時に、滑稽小説的な側面

が作品の基調となつてゐることを強調した。その他、求められて書いた西鶴の作家論<sup>(1)</sup>などにおいても私は、右の主張をくり返して来ているのである。

それが現在、どの程度認められているのか、私自身にはよく分からないのだが、おそらくは、右のような側面があることは一応承認されたとしても、それだけで『一代女』をとらえるのは無理、やはりサンゲ物語の枠組を認めた上でそのような一面もあると見るべし、といったとらえ方が今もなお一般的であるように見うけられる。いわば、私の疑義は、従来の見方の中に囲い込まれてしまつてゐるようなのである。

もつとも私は、それをさ程不満には思つていない。それまでのパセティックな『一代女』の読み方をいささかでも解消する上で、私の疑義が少しでも意味を持てるとすれば、そして右の主張が『一代女』の一面として承認されるとすれば、『一代女』をより、豊かな面白い作品として見直そうとした私の問題意識は、十全とはいかないにしても、何らかの意味を持ったのではないかと考えるからである。

が、右の二論考で提示した『一代女』の側面は、『一代女』のより豊かな面白さを探りあてるための一部分にすぎないことも明らかである。すぐれた作品とは、種々の方向から光をあてられることによってその豊かさを現出するもの、『一代女』の場合ももとより然りであろう。とすれば、『一代女』を豊かな作品として見直すべく、どのような方向から光をあてたらよいのか。

研究者・評家それぞれの問題意識からする以外にないことは明らかだが、私自身の場合、十数年前から『武道伝来記』を突破口<sup>(2)</sup>として、出版規制を配慮してカムフラージュを行いつつ書く西鶴、カムフラージュを行いつつもしたたかに武家階層などの行為や心情のあり方を諷する西鶴、という視点を確立すべく、注<sup>2</sup>所載の論を書き続けて来た。当然その過程で、『一代女』も視野に入れ、出版規制のもとでどのような自主規制やカムフラージュを行っているかについても若干触れたが、『一代女』は思いの外危険な作品、その揶揄と諷刺のあり方はかなり強烈なのではないかと考えるようになった。そこで『好色一代女』の一側面——その揶揄と諷刺——（『西鶴文学の魅力』（平6、勉誠社）を書いたが、それは制限枚数の関係もあり概略を示すのみに終ってしまった。また『好色一代女』の自主規制——武家階層への諷諭の視点（国文学研究、一二五集）も発表した）が、そこでは、当時の出版規制のあり方をあらためて問題としたために、巻一の三「国主艶妾」、巻三の一「町人腰元」について若干詳しく論ずるのみ、他の二十二章には、ほとんど触れることが出来な

かった。若干不本意ではあったが、これまた制限枚数の厳しい雑誌のこと、致し方ないことでもあった。

そこで本稿では、すでに論じた出版規制や西鶴の自主規制・カムフラージュのあり方などについては必要最小限の指摘にとどめ、『一代女』の持つ諷刺小説的な側面について巻二までの若干の章をとりあげながら具体的に問題としつつ、その豊かな面白さの一面を見直して行くこととしたい。（なお、巻一の三については、前出拙稿で詳論したので省略すること、及び前出の拙稿と若干重なる部分があることを、あらかじめお断りしておきたい）。

## 二

『一代女』巻一の一「老女のかくれが家」の前半部は、一代女がその生涯を語り始めるまでの前置きとも云うべき部分、それが、『遊仙窟』の面影や文辞をとり入れ、『たきつけ』『けしずみ』の趣向を継承した導入部であることは周知の所である。が、この前半部が、以下の一代女の語りどのような関連を持っているのかという問題は、まったく取りあげられないままに『一代女』が論じ続けられて来ていた。私は、その点に問題を感じ、前出『好色一代女』論序説<sup>(1)</sup>において、「身のうへの昔を時勢<sup>いまやう</sup>に語り給へ」という要請に注目、一代女が、その要請に応えて、当世（天和・貞享期）の好色風俗を生きる女の立場で「身のうへの昔」を「時勢<sup>いまやう</sup>に」転じつつ語るとい

う語りの方法が生まれ、それが、『一代女』全体に一貫して存することを論じた。また、前出『好色一代女』試論』では、その巻頭の一句「美女は命を断つ斧」が、一代女の中での生のありようを象徴するものであり、その冒頭部の一節が『一代女』全体をより面白く読むための手がかりとなりうるものであることを主張した。

が、右の二点とも、それまでまっとうに取りあげられることなかった巻一の一前半部の一、部をとりたてて問題としているのみであることは云うまでもない。が、この前半部全体の記述の流れを見直してみるとどうなるか。そこには、西鶴が『一代女』でねらう、さらなる一面が現れて来るのではないか。まず、その点から問題にしてみよう。

美女は命を断つ斧と、古人もいへり。心の花散り、ゆふべの焼木となれるは、何れか是をのがれじ。されども、時節の外なる朝の嵐とは、色道におぼれ若死の人こそ愚かなれ。其種はつきませず。

右の冒頭部が、『一代女』全体に通じる基調音となつて生きていることは前出拙稿で論証したので省略に従うが、<sup>(3)</sup>ここでは、「美女は命を断つ斧」と知りつつも「色道におぼれ若死」する人を「愚かなれ。其種はつきませず」と嘲笑していることに、あらためて注目しておきたい。すなわち、美女一代女の前を各章ごとに次々と通りすぎて

行く「愚か」な男たち、つきることのない「其種」が生かされ多様に各章を展開してゆく——それが『一代女』であることは、各章に登場する男たちに焦点をあてて見直せば、一読明らかなのである。

その一部については後述するが、この冒頭の一節によつて西鶴は、世の男どもの愚かしさを諷する鋭鋒を強烈にくり出していると見てよいであろう。（その後、作者とおぼしき人物が後述の二人の若者の跡をつけ、好色庵に至り一代女の話を立て聞きする、という趣向が設けられている。これが『たきつけ草』の冒頭部の趣向を踏襲したものであることは確実だが、この趣向を作品全体の中で西鶴がどのようになかそうとしたのか、今私は、適切な答を出せない。巻一の一前半部のみに作者とおぼしき人物が登場させ、以下の場面や一代女の語りの証人<sup>いん</sup>とすることで、嘘<sup>うそ</sup>はなしでないことを保証し、本当らしさを読者に感得させようとしたのであろうか）。

ともあれ、「色道におぼれ若死」する「愚か」な男たちを一般論として諷した後、

何<sup>う</sup>怜<sup>れん</sup>しげなる當世男<sup>とうせいなん</sup>の、采<sup>とり</sup>体<sup>なり</sup>しどけなく、色青<sup>いろあざ</sup>ざめて、恋<sup>かた</sup>に貌<sup>なり</sup>をせめられ、行く末頼みすくなく、追付け親に跡やるべき人

が登場、これはまさに「色道におぼれ若死」する「愚か」さを体現している若者たちである。さらに、一人はなおも「契水絶えずもあらまほしき」と愚かしい願いごとをし、一人は「我は又、女のなき

国もかな。其処<sup>そこ</sup>に行きて、閑居を極め、惜しき身をながらへ……」  
と「色道」からの隠退願望を持つ。確かに「この二人、生死各別のおもはく違ひ」ではある。前者は「若死」目前。後者は「若死」を逃れようとしているわけだが、それでも二人は「人命短長の間、今に見果てぬ夢に歩み、現に言葉をかはすがごとく、邪氣<sup>じやけ</sup>乱つ<sup>うづ</sup>のつて」、一代女が隠棲する「好色庵」を訪れるのである。

このような「色青ざめて……行く末頼みすくな」い賢虚風の二人、その描写自体が男の愚かさを諷しているわけだが、そのような状況の中で「生死格別のおもわく」を持つ人のありようを、作者はさりげなく可笑しく浮び上らせている。一方、それでいながら二人ともに「今に見果てぬ夢」を求めて、「好色庵」へとたどりつかせると話を進めていくわけである。ここに「愚か」な男の性<sup>さが</sup>を可笑しく具体化する作者の姿勢を感得することは容易である。

この後の「好色庵」とその周辺の風景、そこに隠棲する一代女の様子は、一見風雅な趣に描かれ、「愚か」な男どもが心ひかれる風情を現出させている。が、同時にここで読者は、賢虚同然の若者二人が、わざわざ「好色庵」にたどりつく可笑み、「好色庵」の風情を見た作者とおぼしき人物が「なほ心も窓より飛び入るおもひになりて、しばし視<sup>のぞ</sup>」き込む、ややおどけた感じの好き心の可笑しさを感得することになるであろう。一見風雅な描写の流れ中にも、作者は可笑しさを、笑いを感じとらせようとしているのである。

かくて、「最前の二人の男」は、「案内<sup>あんない</sup>知った顔に物申<sup>ものも</sup>も乞はず」

に入つて行く。「老女、忍笑<sup>にんしょう</sup>みて」、「けふも又、我を訪はれし。世には悩<sup>なや</sup>みの深き調諷<sup>たはがれ</sup>もあるに、……いかにして尋ねわたられし」という。男たちは、「それは恋に責められ、これはおもひに沈み、いまだ諸色<sup>しよしき</sup>のかぎりわきまえがたし。ある人伝えて、この道にきたるなれば、身の上の昔を時勢<sup>いまいどう</sup>に語り給へ」と願い、老女に酒をすすめる。

老女は「いつとなく乱れて」「恋慕の詩」をしばらくうたい、「そのあまりに一代の身のいたづら、さまざまになりかはりし事ども、夢のごとくに語る」と巻一の前半部は結ばれ、以下は周知のごとく、最終章巻六の四の最後まで、一代女の語りが続いて行くわけである。

右の部分も、作者は、一読明らかなように一見優雅な文体で話を展開している。が、内実は、「好色庵」に隠棲した老女を「恋に責められ」「おもひに沈」んだ「愚か」な男が訪れ、その「一代の身のいたづら」を聞きだして、「諸色のかぎり（＝色の道の諸相）」をわきまえようというのだから、「愚か」な男たちは、ますます「色道におはれ」ることになり「若死」を早める結果となるだけであろう。巻一の冒頭部で提示された「愚か」な男たちのありようは、これまでの話の流れの中で、優雅な文体を通してより一層具体化され、可笑しみを伴いつつ諷刺されているとみるべきなのではなからうか。

これまで『一代女』は、その書名のゆえもあって、一代女という主人公の行為や心情を中心に見られて来た。が、その冒頭部において男の「愚か」さを諷し、巻一の前半部においてもその具体化が行われていることは、右に見た通りなのである。

思えば、一代女の生が男との相関を通して語られるものである以上、男は、ほとんどの場合「愚か」なものとして対象化されざるを得ないものなのかもしれない。そのためか『一代女』は、性を介して男の「愚か」さを取りあげる場合、たとえ「若死」まではしなくとも、面目を失し恥をかき、社会的な「若死」をせざるをえない状況を作中に数多く導入する。そして、その対象は、当時の社会階層でいって上層に属する者が多く、上層に属する者ほど諷刺の標的として有効となる。それは、現代とてもまた同じなのである。

やや脇道にそれたが、『一代女』は、後述のごとく、性を介して男の「愚か」さを諷する姿勢を随所に示す。とすれば巻一の一前半部は、そのような男の「愚か」さへの諷刺が、作品全体の重要な側面、というよりはその基調低音部となっていることを読者に示唆する導入としての意味をも持っている位置づけることができるのではないか。この意味でも、巻一の一前半部は、読み流しにすることの出来ない部分なのである。

### 三

各章ごとに「さまざまになりかは」って、「一代の身のいたづら」を語って行く『一代女』は、巻一の一後半部から、

自ら、そもくはいやしからず、母こそ筋なけれ、父は後花園

院の御時、殿上のまじはり近き人のすゑく……

と語り始める。まず「大内のまた上もなき官女につかへ」ることになるが、「十一歳の夏はじめより、わけもなく取乱し……」と、そのファッション・センスの優秀さ、早熟ぶりを誇らしやかに語る。続けて、

されば公家がたの御暮しは、歌のさま鞠も色にちかく、枕隙なきその事のみ。見るに浮れ、聞くにときめき、おのづと恋を求めし、

と、「わけもなく取乱し」たその「わけ」が、「公家がたの御暮し」すなわち「枕隙なきその事のみ」に刺激されたものであることが明らかにされる。これは一見さりげない書き方だが、そこに見られる作者の強烈な諷刺の視点は明らかに感得できる。「枕隙なきその事のみ」の「公家がたの御暮し」とは云いえて妙、お公家さんはヒマヤシスキやからなあ、といった当時の町人読者の受けとめ方を予期して書いている西鶴の皮肉な筆法は痛烈といってもよいであろう。

云うまでもなく当時の「公家がた」は、最上層階級である。政治的な力は持てず、経済的にも恵れていなかったとはいえ、貧乏公家でも中小大名よりも位は上、といった事例には事欠かない。また、公家社会の性のあり方が、中世以前からの伝統を継承しているが故

に、庶民層から「取乱」れていると受けとめられたであろうことは周知のところである。当時の最上層階層なるが故に巷間に噂される風聞なども少くはなかったにちがいない。それらを背景としながら日頃お高くとまっているお公家さんたちでも、やっていることは……といった何時の時代にもある庶民的な感覚に訴えかけて笑いをとうとうとしているのであろう。が、「枕隙なきその事のみ」と「公家がたの御暮し」を道破するのは少しく過激、恰好をつけ勿体をつけて生きている当時の最上級階層（たとえ位の上だけではあっても）に対して、日頃面白からず思っている町人西鶴の鬱憤<sup>うづぶん</sup>が、このような諷刺を行う発条となっていると見ていいように思われるのである。（本稿では触れないが、その点は、「国守Ⅱ国持ちの大名」をとりあげる巻一の三に最もよくうかがえると思う。前出の拙稿『好色一代女』の自主規制」参照）。

右のような過激な諷刺の後、そのような「公家がたのお暮し」の中での一<sup>、</sup>代女のもてぶりが語られ、恋文が山のように届けられたにもかかわらず気をひかれることもなかったとして、

恋程おかしきはなし。我をしのお人、色作りて美男ならざるはなかりしに、是にはさもなくて、去る御方の青侍、其身はしたなくて、いやらしき事なるに、初通よりして文章命を取る程に、次第／＼に書き越しぬ。いつの比かもだ／＼とおもひそめ……

と、一代女の初めての恋の話が展開する。「恋程おかしきはなし」とはいえ、「其身はしたなくて、いやらしき」「青侍」に惹かれ、「色作りて美男」のお公家さんには「さもなか」ったというわけである。これが、美女と野獣とまではいわぬにしても、あえて奇談風の人物関係を設けることで話を面白くしようとする所から生まれていることは確かだが、同時にここには「枕隙なきその事のみ」に執する「美男」たちのいやらしさを嫌い、その「御暮し」を揶揄、諷刺する作者の姿勢を感得すべきなのではなからうか。「枕隙なきその事のみ」の一言は、さりげなく云い捨てられているようでありながら、その含む毒は強烈、官位の高い「公家がた」の「色作」る「美男」など相手にもしない一代女の行為のあり方自体が、当時の最上層階級への諷刺としての意味を持っているのである。（その後の話の展開は省略。青侍との恋の結果をどう読むかについては、前出拙稿『好色一代女』試論」を参照。）

続く巻一の二「舞曲の遊興」の前半部では、舞子の起源、当世（Ⅱ天和・貞享期）のその実態が詳述されているが、その部分で西鶴は、

諸国<sup>、</sup>の侍衆<sup>、</sup>、又はお年よられたる方を、東山<sup>、</sup>の出振舞<sup>、</sup>の折節、五七人もうちませたる風情は、またこれよりはあるまじき遊興ものぞかし。男ざかりの座敷へはすこしぬる過ぎて見えける。一人を金<sup>、</sup>一角<sup>、</sup>に定め置きしは、軽行<sup>かるゆき</sup>なる呼び物なり。

と、舞子の客層、その遊びの場、遊興費等を具体的に示している。当時の好色風俗を情報として伝授するという意味で興味深い一節だが、ここで注目されるのは、「諸国の侍衆」を「東山の出振舞の折ふし」などに「一人を金一角に定め置」いて遊興させる「軽行なる呼び物」が舞子だと位置づけていることである。

ところで、この「諸国の侍衆」とはどのような「侍衆」なのだろうか。右の記述に具体性はないが、それはおそらく、地方の諸藩から京へ派遣されて高級な調度品や絹織物、武具や馬具などを買付けに來た御納戸方の武士たちを示唆しているにちがいない。すなわちここには、あえて具体的な記述を避けつつも、その「遠国の侍衆」が、高級・高価な島原遊びなどではなく、「東山の出振舞」での「軽行なる呼び物」の接待でごまをすられてやにさがり、多分実質（正価）をはるかに超える高値で品物を買わされることになっている実態、各藩御出入の呉服所などの商人が、安上がりでの接待で「侍衆」に攻勢をかけている実状などが、まさにさりげなく、具体的に裏側を描写することなく、暴露されているのである。

さらに、右の部分に続けて、舞子が「十四五」才となり、「客、ただは帰」さなくなった頃の舞子の手管が以下のように描写される。

人（客）の心まかせなるやうにじゃらつきて、かんじんのねれかかれば、手をよくはづし、その人になづませ、「我おほしめ

さば、忍びてお独り、親方への御入りあらば、よき首尾見合せ、酒に酔ひ出し前後覚えぬ風情、寝かけたる時、囃子方の若い者どもに、すこしの御心付ありて、御機嫌とるさわざのうちに「事」と、深くおもはせ、おもく仕掛けて、遠国衆にしたたか取る事なり。

右の「遠国衆」は、前述の「諸国の侍衆」の云い変えと見てよいであろう。京へ高額の品を買付けに來た野暮な田舎侍が、「東山の出振舞」などで浮かれてやにさがり、つい年増の舞子を口説くものの、舞子の方ではそうなることをあらかじめ承知、右のような手管を弄して「したたか」にまきあげるといった様子が、見事に描きあげられている。おそらく公金に手をつけたら切腹ものの田舎侍、翌朝は自分のカラ財布を見て嘆息、ということになるのである。ここでも男の「愚か」さが可笑しいが、この舞子の単なる風俗や手管紹介と見える巻一の二前半部の中にも、京へ高級品の調達に派遣された田舎侍（とは云っても多額の金の出納を任されている御納戸役、相應の分別もある武士のはずである）たちが、舞子程度のものを「出振舞」であてがわれ、商人たちに籠落され、さらには、出張時の解放感や欲求不満から財布を空にされる実状が目につかぶような書き方で描かれているのである。ここで「諸国の侍衆」「遠国衆」とおぼめかして書くのは一種のカムフラージュ（その実態は読者も十分に承知の上であろう）、それをカモにする御用商人や舞子といった構図

を鮮明に浮かび上らせるこの部分で西鶴は、当時の御用商人のセコいやり方を揶揄し、それにはまる田舎武士を諷刺しているのである。しかも、その諷刺をあらわな批判の言葉とせず、舞子の風俗を紹介風を書く中で読者に感得させる。すなわち、あらわにはなく、むしろさりげなく書きながら痛烈な諷刺を読者に印象づける巻一の二前半部の描写には、真正面からの批判ではなくそれをカムフラージュによって行おうとする西鶴の戦略が十二分に生かされているといえるのではなからうか。

#### 四

巻一の二に続く巻一の三「国守艶妾」については、前出拙稿を御参照いただくことにして、巻一の四「淫婦の美形」以下を次に問題とする。

巻一の四から巻二の二「分里の数女」までの三章は、周知のように、一代女が島原の遊女として活躍する時期を語る部分、太夫（巻一の四）、天神（巻二の一）、囲以下（巻二の二）と章ごとにその位が下がり、それぞれの位の遊女のありようが、具体的かつ印象的に描写され、その過程での遊興の種々相が提示されることになる。従って、これらの諸章では、太夫、天神、囲以下の遊女の当時のありようを差異化して描く風俗紹介や、それぞれの位の遊女に対応する客との対応の相異といったことが中心になる。が、ここでは、それら

の諸章に見られる諷刺小説的な側面を問題にするので、以下、客と遊女との対応の場面の一部、および巻二の一冒頭部の一挿話のみを問題として行くことにしたい。

もつとも、遊女と客との対応とは、お互に相手を「敵」と呼んで駆引きを行う遊興の場でのことである。時に遊女の側が諷されることはあっても、可笑しみを生むのは「愚か」な男を手玉にとる遊女の手管、それに翻弄される遊客の姿である場合が多い。それ故に、右の三章では、当然ながら男の「愚か」さを諷していると見られる話題が多くなる。（当然のことながら、遊廓以外で売色の世界を生きる一代女の活躍する諸章でも同様である）。例示には事欠かないが、紙数の関係もあり、ここでは巻一の一四の中から「まだしき素人師」が遊女（一代女ということになっている）の手玉にとられている部分（本章中では最多の分量で描写される）をとりあげてみよう。

遊女に圧倒されている男（素人師）は、

床に入りてもその男、鼻息ばかりせはしく、身うごきもせず、たま／＼いふにも声をふるはし、我が物を遣ひながらこのせつなさ、茶の湯ころえぬ人に、上座の捌きさすに同じ。

自分の金を出して買った遊女にまったく押され気味、うじ／＼と仕掛けても相手にされぬ「せつなさ」は「茶の湯……」の評が見事に納得させられる一節であり、野暮な男のあせっている姿が滑稽み



をただよわせて浮び上ってくる場面である。

一方、遊女の方は、「この男嫌うてふるにあらず。かしらから帥顔<sup>すいがん</sup>をせらるるによつて、こなたからもむつかしく仕掛け」たのだという。遊びなれた顔をして野暮な客が嫌われるのは、何時の世も同じが、そんな人物を登場させて可笑しく諷する巧みさは西鶴以前の作品には見られぬ所である。遊女の方は

帯をもとかず、いんぎんにあしらひて、空寝<sup>そらね</sup>入りなどしてゐるを、大方の男、近く寄添ひて片足もたすを、なほだまりて、それから後の様子を見るに、身もだえして汗をかき、

といった有様。何とも可笑しい漫画的な情景が展開する。隣の床ではよろしくやつている声が聞こえ「あたりにこちよげなる事のみ」。いよいよあせつた男は、「なお目のあはぬあまりに女郎」を起こして、九月の節句の約束の有無を尋ねて気をひこうとするものの、「そんな事はちよろく見えすき」、にべもない返事。男は「かさねて寄添ふ言葉もなく、残念ながら人並に起別れ」るが、それでも髪をほどき帯を仕直して「分立<sup>わけ</sup>てたるやうに見せ」ようとす。見事に振られて、それでいて見栄をはる——まさに男の「愚か」さそのものであり、文字通り「をかしけれ」というしかない。

もとより男は面白くない。「この男、下心<sup>したこころ</sup>に女郎をふかくうらみ」、他の遊女と派手に遊ぶか、野郎狂いに遊びをかえるかすることにし

て、「友とせし人ども、夜の明くるに恋を惜しむを、せはしく呼び立て、「大方にして帰さいそげ」と、これぎりに女郎すて行」こうとする。前夜もてなかつた男が、腹立ちまぎれに友だちを起してまわる姿は、後年の洒落本や落語の世界を先取りした趣だが、もとより西鶴以前の作品に見ることの出来ぬ、男の「愚か」さを可笑しく描いた見事な一場面である。

が、腹立ちまぎれにふてくされたこんな男でも、「取留むる仕掛け」があるのだ、と話は続いて行く。

相客<sup>あいやく</sup>の見る所<sup>ところ</sup>にして、そそけし髪を撫で付けてやりさまに、耳とらへて小語<sup>ささや</sup>は、「我<sup>が</sup>を我<sup>が</sup>に立てて、人に帯とけともいはずにかへる男め、にくや」と、背<sup>せなか</sup>をたたきて足早に台所へ出れば、……

といった演技、「相客の見る所」がねらい目である。「相客」の友だちは、昨夜の首尾を尋ねる。「男よろこび、「命掛けて間夫<sup>まぶ</sup>」という。すでに昨夜の首尾を知っている読者は笑い出さざるをえない所だが、見栄つぱりのこの男、「この程つかへたる肩までひねらせた」と昨夜のもて方を自慢、「汝等が取持て身代よきに咄して聞かしたか」といい気なものである。

「いや／＼、欲ばかりにして女郎<sup>さやう</sup>の左様<sup>さやう</sup>にはせぬ物、これは見捨て難し」とおだてられ、男は自分の嘘が何だか本当のことであつたやうに思えて来る。かくて「その後、まんまと物」にされてしまうの

である。遊女の手管にのせられ、鼻毛をのばし、いずれ身代すべてをむしりとられるに違いない「愚か」な男、ここに登場する「素人帥」の人物像は鮮明であり、「遊女評判記」類の手管の解説などとは次元を異にする巧みな描写と話の展開である。と同時に、この場面を通して、男の「愚か」さを諷刺する姿勢は一貫している。これは、『二代女』の諷刺小説的な側面の面白さ、可笑しさを充分に感得させてくれる一例であり、これまでの作品にない世界を創出していると思うが、いかがであろうか。

## 五

遊興の世界が、常に金銭によって支えられているものであることは云うまでもないが、それをあらわにすることが野暮とされる世界であることも周知の所、「世界の偽かたまつてひとつの美遊」（『西鶴置土産』序）となるものと分かつてはいても、金の力がすべてといわれてしまつては、興味索然とせざるをえないのが遊興の世界であろう。が、『二代女』巻二の「淫婦中位」冒頭部では、以下の一挿話によって、遊興の世界の内実をすこぶる皮肉に印象づけようとしているのである。

朱雀の新細道をゆきて、島原の門口につゐに見ぬ、なる事あり。  
 大津馬に四斗入の酒樽を乗下に付け、縦縞の布子に鏝なしの脇

指、竹の小笠をかづき、右に手綱、左に鞭持ちて、心のゆくに  
 まかせ行くに、……

島原では「つゐに見ぬ図」と書き出されているように、大津馬に乗り酒樽を脇に積んだ野暮丸出しの田舎者が、大門を過ぎて揚屋町へと乗り込むなどということは、現実にはありえぬ情景である。この男の傍若無人ぶり、島原の慣習を知らぬことを誇張すべく、虚構して書かれたものである。その男は、揚屋の丸屋七左衛門方へ到着、馬方が紹介状を渡す。

紹介状の書き手は、越後の大臣客、揚屋にとつて最上の客だった人物だが、その書状には、

越後の村上よりこの人女郎買にのぼらるのよし、随分御馳走  
 申し、その里の遊興の後、大坂も見るべきとの望み、……我等  
 同然に頼む

とあるので、揚屋の者たちは、その村上の男の「様子を見るに、よ  
 ねぐるひの風儀にあら」ぬ風情、「何とやら心もとなく」思い、

「おまへさまの傾城ぐるひなされますか」といへば、田舎大臣、  
 にがい顔をして、「この人が買はれます」と、革袋ひとつなげ出  
 せば、梧のとの角なる物、三升程うち明け、今くれかぬる一步

を、一握りづづまきければ、

揚屋の者たちは、「かたじけなしと、夕暮の寒空になる質どもを請けることが出来ると、たちまち大臣客あつかい。「この人が買はれます」と銀袋を投げ出し、一步金をまきちらす男に對し、もはやその野暮な「風儀」などは問題外なのである。揚屋の者たちの豹変ぶりが可笑しいが、金の前では、粹とか野暮とかの遊興の論理が何の意味も持たないのが遊廓、そのありようがここに見事に具体化されているのである。

さらにその後、「お盃といへば」「我、国酒を呑みつけて、外なるは氣に入らず、されば、はる／＼より樽二つ」を持つて来たという。「京の酒がお氣にいらずば」京の遊女も氣に入るまい、と皮肉られても物ともせず、田舎大臣は、「床もかまはず、心入れもしまぬ物、これよりうつくしきはこの里に又なきといふ太夫を、見るまでもなし、取寄せよ」といった注文。金銀の団扇で太夫、天神の位を知らせて遊女を見せると、田舎大臣は、一代女に心を惹かれ「見し恋とな」るが、この章で一代女はすでに位をおろされていて、銀の団扇で指される天神となっている。田舎大臣は、

我等は国<sup>ぞい</sup>元の贅ばかりなれば、太夫でなくば望みなし。あまた見つくせし中に、あれ（『一代女』程うつくしきはまたもなきに、天神になしけるは、内証にあしき事のありや

と、「是非にかなはぬ取沙汰せられて」、一代女は田舎大臣から問題とされなくなる。

右の挿話も又、遊興の論理から見れば全く規格をはずれた行為だが、野暮を押し通し、「恋」などは物ともせず、「国元の贅ばかり」に遊興することが可能となるのは、いうまでもなく金の力なのである。それに振りまわされる揚屋の者たちも遊女も、金の力の前には圧倒されるのみ、日頃勿体らしく重んじている遊興の世界の規範、粹とか野暮とかいう遊廓の擬制的な論理などは、簡単に吹きとばされてしまうのである。

西鶴が、この強烈な一挿話によって言わんとすることはもはや明らかである。ここでは、金の威力のみによって遊興の理想（というより、擬制としてのみ存しうる粹・野暮といった規範のあり方）を物ともしない田舎大臣を可笑しく登場させて、その野暮な遊興ぶりを描き、それに振りまわされる揚屋の者たちや遊女をさりげなく印象づけることによって、遊興そのものの擬制的なあり方を浮び上げ、その内実と同時にその空しさを鮮明にしているのである。この挿話は、一見野暮な田舎大臣を可笑しく描いているだけのように見せながら、遊興を支える金の威力を強調しつつ遊興の論理の持つ脆弱さを痛烈に諷刺しているといえるであろう。このような挿話を『一代女』の遊女時代の中間に配して、遊興の世界の内実を印象づけるところにも、『二代女』の諷刺小説的な側面を十分に見てとることができるではなからうか。

## 七

遊女としての「十三の年明きて、頼む島もなき淀川の川舟に乗りて、二たび古里にかへ」(二の二)った一代女は、以後、ふたたび一般社会へと戻って、種々の職業(とは云え、遊女同然の売色にかかわるものも多い)を転々としながら活躍を続けて行く。その初めに位置するのが巻二の三「世間寺大黒」であるが、そこでは、当時の上層階級と称すべき僧侶(それも一寺の住職クラス)が一代女の相手となる。

一代女は、「小作りなるうまれつきの徳」で若く見えるという設定、まず「寺小姓」となつて若衆姿で「世間寺のうとく成るを聞き出し」、「一夜つづの情代、金子二歩に定め置き」て、「諸山の八宗、この一宗をすすめまはりしに、いずれの出家も珠数切らざるはなし」という次第となる。さらに、「その後は、さる寺のなづみ給ひ、三年切りで銀三貫目にして、お大黒さま」となつた時の体験が語られる。(ここでは「さる寺」としか名が記されていないが、巻一の三の「ある大名」といった書き方と同じく、以下の話のモデルを読者にあれかこれかと考えさせるための書き方と見られるかもしれない<sup>(5)</sup>)。とは云え、僧侶の墮落といった話題は、中世説話や西鶴以前の小咄本などにも多く、当時巷間でも語られることの少なくないものである。そしてそれらで僧侶は、常に揶揄・諷刺の対象となつてゐるわけだけ

ら、ここで事新しく諷刺性を云々するまでもないのだが、本章での『二代女』の諷刺のあり方は格別、読者の哄笑をさそいつつ奇抜な話を展開して行くのである。

契約制の「大黒」の「置き所」は、「居間のかた隅を深くほりて、明り取りの隠し窓ほそく、天井も置土……奥深に拵へ」た地下室、「昼はこれに押込められ、夜は寝間までも出」るのだが、本章の僧侶は、巻一の三の「ある大名」との対照を意図してか、すこぶる強壯である。

いや風坊主に身をまかせて、昼夜間もなく首尾して、後にはおもしろさもやみ、をかしさも絶えて、次第におとろへ姿やせけるも、長老は、さらに用捨もなく、「死んだらば手前にて土葬」と思ふ顔つき、おそろし。

精力絶倫の「長老」から「死んだらば手前にて土葬と思ふ顔つき」で「昼夜間もなく」せまられる一代女、「おそろし」とは称せ何とも滑稽な場面だが、性に飢えた僧侶一般をすさまじく揶揄し可笑しく諷しているものであることはいふまでもない。

「なるればそれも憎からず」思い、「無常の重なる程、お寺の仕合せを嬉しく」といった、人の心の移ろいやすさを一代女に語らせつつ、一方「長老」を見習つた「小僧等まで」の「自墮落」ぶり「赤鯛袖にかくして、仏名書きすてし反古に包焼き」などと可笑しく

具体化される。かくて、寺の暮しにも馴染んだ「ある夕暮」、「独り手枕の夢もまだ見ず、まぼろしに」幽鬼のような姿の老婆が登場、一代女に恨み言をいう。「我、この寺に年ひさしく、住持の母親ぶんになって」、かつては「人しれず夜の契り」も浅からず過したのに、今は「死にかねる我をうらめしさうなる顔つき、さりとてはむごくおもへど」、それはまだ我慢ができる。

うらみの日をつもるは、そなたは我をしられぬ事ながら、住持と枕物語聞く時は、この年、この身になりても、この道をやめがたく、そなたに食付き、おもひ晴らすべき胸定めて、今宵のうち

と、何やらブラック・ユーモア風の恨み言。この奇談仕立ての挿話の中で、「住持」のこれまでの好色ぶりや冷酷さが暴露されているわけだが、この恨み言が「身にこたへ、とかくは無用の居所ぞ」と思っただ一代女は、「ここを出てゆく手くだ」をめぐらす。

常なる着物の下がへに綿をふくませ、その姿おもくれて、「今まではかくせしが、我が身持も月のかさなり、いつを定めがたし」といへば、長老おどろき、「はやく里にゆきて、無事なりて又帰れ」と、布施のたまりを取集め……あがり物の小袖を「産衣よ」と、ある程惜しまず、「名は石千代」と、うまれぬ先から祝ひけ

る。

と、見事に長老をだますが、だまされた長老は男の「愚か」さをまさに体现して、あわてたり喜んだり、その姿が滑稽に描かれて読者の哄笑をさそう。一方の一代女は、もううものはもらった後で、

この寺もあき果てて、年も明かぬにかへらず。出家のかなしさは、それとても、公事にはならず。

と、平然と「長老」を嘲笑して、本章に落ちをつける。確かに世間的に許されぬ契約制の隠し「大黒」に溺れこんだ「出家のかなしさ」で、一代女を訴えれば数蛇、その「自堕落」を浮世に暴露してしまっただけである。「いや風坊主」とその強壮ぶりを揶揄された「長老」は、この落ちによって見事に復讐されているのであり、「公事にはならず」の一言は辛辣と評するに足るであろう。

前述のように、僧の堕落といった話題は珍らしいものではない。が、一見ふざけた調子で誇張を加えながら「世間寺」の「長老」の堕落を笑殺する本章の描写の裏には、日頃恰好をつけ勿体ぶっている僧侶（それも当時の上層階層の一人である）を徹底的にからかうとする西鶴の姿勢を十分に感得することができるであろう。僧の堕落を諷する数多くの説話の中でも極めて痛烈、しかも可笑しみに富んだ一級の諷刺小説と位置づけることのできる作品と思うのだが、

いささか過褒にすぎるであろうか。

## 八

寺を離れた一代女は、次の巻二の四「諸礼女祐筆」で、「女子の手習所」の師匠となる。これはもとより一般の寺子屋ではなく、「上つかたよろづにつけて年中の諸礼」を教え、「女筆指南」を行なう、『日本永代蔵』巻二の一にも出る「女寺」（女子専用の寺子屋）である。

当時の上層町人（ということは分限者）の娘の目を対象とする高級寺子屋といった所、その始まりの時点は今詳かにしないが、おそらくは当世（＝天和貞享の時点）に流行し始めた、新しい形のお嬢さま学校といった所であろう。そのような「女寺」の師匠に、十三年間遊女暮しをした後の一代女がなれるのか、といった不審は当然あるが、西鶴はその辺はおおらか、「我、むかしはやごとなき御方ありし、そのゆかり」と簡単に片付けてしまう。（『一代女』は、各章ごとに独立した短篇としても読める構成をとるから、一代女の経歴に矛盾があってもかまわない訳だが、本章では、一応は巻一の一と関連させることで、読者を納得させようとしているのである）。

ところで、「女寺」の女師匠とは、当時どのようなものと見られていたであろうか。『一代女』では、女師匠一代女が、

門柱に女筆指南の張紙して、一間なる小座敷見よげに住みなし、

山出しの下女ひとり遣ひて、人の息女をあづかる事大方ならずと、毎日おこたらず清書をあらため、女に入る程の所作をしへ、身のいたづらふつくとやめて、何の気もなかりしに、

と描き出されているが、ここに見られるごとく、「人の息女」の教育者、お上品にかまえ、恰好をつけ、身ぎれいに生活しているのが高級寺子屋の女師匠という存在であろう。上流階層を相手にする職業、少くとも表面は勿体らしくつんとすまして、「いたづら」などとは無縁でなければならない。

西鶴は、昨今流行し始めた「女寺」のそのような女師匠たちも、実は、と揶揄しようとして、一代女をこの職業につけたと見ていいのではないか。本章では、「何の気もなか」ったはずの一代女が、ふとしたきっかけで好色一代女へと転換するが、そこには、勿体ぶった女師匠たちの裏側を諷刺する皮肉な姿勢を感得できるのである。

ふとしたきっかけとは、「恋を盛りの若男」に恋文の代筆を頼まれたことである。女師匠ならこんなこともあろうか、といった所から生まれた趣向であろう。もと遊女の一代女、恋文ならお手の物、「我たのまれて文書くからは、いかに心なき相手なりとも、おそろくはこの恋おもひのままに」とひきうけ、「文章つくせしうちに、いっとなく乱れて、この男、かはいらしくなれり」というわけである。恋文の代筆に熱中しているうちに心が「乱れて」来るというこの展開は絶妙、かくて手近な所で間にあわせようと「この男」を口説くこ

となる。

ある時、筆持ちながら、しばらく物おもふ顔なるが、恥捨てて語り出しけるは、「そなたさまに氣をなやませ、つれなくも御心にしたがはぬは、世にまたもなき情しらずといふ女なり。はかどらぬそれよりは、我に思ひ替へたまはんか。ここが談合づく、女のよしあしはともあれ、心立てのよきと、今の間に恋のかなふと、さしあたつてお徳」

「我に思ひ替へたまはんか」「さしあたつてお徳」の口説き文句が可笑しいが、日頃勿体ぶつてお上品に構えている女師匠のイメージを背景にすれば、これは、押し付けがましさを伴った過激な卒直さ、「この男おどろき、物いはざる事しばらくなりし」というのも当然、読者も嘩然としながらも哄笑する以外にないであろう。

が、男は「愚か」なもの、よ程のことがない限り口説かれてその氣にならぬ者は稀である。「先はしれぬ事、近道にこれもましぞ」と思い、「殊にはこの女、髪のちぢみて、足の親指反つて、口元ちいさきに思ひつき」、金のかからぬ事なら相手になつてもいい、といったちやっかりした返事をする。一代女は、「よき事させながら、あまりなる言葉がため、にくし、さもしく」と怒り心頭、「この広き都の町に、男日照はせまじ。又外にも」と思っている時に、五月雨がふり出し、窓から薮雀が飛びこんで来て灯も消える。「闇となるを幸に、

この男ひしと取りつき、はや鼻息せはしく……」といった状況となり、男は、

我がよわ腰をしとやかに叩きて、「そなた百まで」といふ。「をかしゃ、命しらずめ。おのれを九十九まで置くべきか。最前の云分も憎し。一年立たぬうちに、杖突かせて頃はそらせて、浮世の隙を明けん」

と、一代女は、ちやっかりした男に猛然とした、とは云え何やら可笑しい報復を決意。氣位の高い女師匠は、怒らせたら恐いのである。さもありなんと、笑わせるところである。かくて、

昼夜のわかちもなく、たはぶれ掛けて、よわれば、鱷汁、卵、山の芋を仕掛け、あんのごとく、この男次第にたたまれて、

翌年の四月にはダウン寸前、

世上の更衣にもかまはず、大布子のかさね着、医者も幾人かはなちて、髭ばうばうと爪ながく、耳に手を当て、きみよき女の咄をするをも、うらめしさうに顔をふりける。

まさに艶色コント風の展開と落ちを伴う一章、読者を哄笑させる

好短篇である。が、この作品での一代女が、「女寺」の女師匠であることに注目すれば、日常の世界でお上品かつ勿体ぶっている当世はやりの女師匠を導入し、それを痛烈に揶揄していることは明らかである。プライドの高い女師匠を下手に相手にすると、「この男」のごとく恐い目にもあいかねないのである。

一方また、ここでも男の「愚か」さを諷することが基調音となつてゐることに注目すべきであろう。性を介して男女が相対する時、男の「愚か」さの方が笑いの対象、それも明るく笑える、時に哄笑できる対象となりやすい。本章の場合、一見男は悲惨だが、同情して読む読者などは存在しないに違いない。男は笑われ、揶揄されるのみに終るのである。

本章は、右のように、女師匠のありようや男の「愚か」さを揶揄する両面を備えているが、正直な所、巻一の三や巻二の三のように、あらわな諷刺といえるような書き方がなされているわけではない。従つて、諷刺小説的側面を云うには、やや不十分ということになるかもしれないが、このような揶揄と諷刺との間の距離は大きなものではない。本章をもまた、『一代女』の諷刺小説的側面の一環として把握し、その面白さを見直してみる必要があるのではなからうか。

## 九

以上、『一代女』巻二までの諷刺小説的な側面をうかがつて来たが、

そのあり方はその章ごとに異なつてゐるように見うけられる。が、それは、一代女が各章ごとに姿（職業）を変え、その関わりを持つ男（「愚か」な男）が異なる以上、揶揄し諷する対象、その方法が区々になるのは、思えば当然のことである。

そして、巻三以後もまた同様である。巻三の一「町人腰元」については別稿で触れたが、巻三の二以後の諸章でも、各章ごとに揶揄や諷刺の対象、その方法は異なる。従つて、もはや制限枚数の制約のある中で、巻三以後を一括して論ずることは不可能である。少しく単純・幼稚な書き方をしたため、いたずらに紙数を費してしまい、巻一の三をはずしたにもかかわらず巻二まで終つてしまふのは不本意であるが、巻三以後はもはや別稿において問題にする以外になさそうである。続稿を期することとしたい。

なお、『一代女』は周知のポピュラーな作品、それにもかかわらず、本稿に本文の引用が多すぎることは承知している。が、西鶴の面白さは、やはりストーリーの要約では十分に把握できず、当り前のことだが、原文を味つて始めて理解できる部分が多いと考える。それ故に引用をあえて多くした点、御了解いただければ幸甚である。

### 注

(1) 拙著『元禄文化 西鶴の世界』（教育社歴史新書、昭57）、『浮世の認識者 井原西鶴』（新典社、昭62）その他。

(2) 『武道伝来記』について触れた諸論、出版規制・自主規制・カムフラージュに触れた諸論の一部は、拙著『西鶴 研究と批評』（若草書房、平7）、



『近世文芸への視座』（新典社、平11）に収録。

（3）『好色一代女』試論——そのしたたかな生と性——」（文学、昭60年7月、10月、注1の『浮世の認識者 井原西鶴』に所収）。

（4）原文では「送り状」となっており、その男が荷物であるかのように記述されているところが可笑しい。

（5）前出拙稿『好色一代女』の自主規制」参照。

（6）注5に同じ。